

神奈川の道徳

日本道徳教育学会神奈川支部 「平成30年度研究大会」

道徳科の新時代に向けて「主体的・対話的で深い学び」を生かした道徳科の授業展開と評価

平成30年12月22日（土）、6回目の「日本道徳教育学会神奈川支部」研究大会が開催されました。今回も、他県から多くの参加があり、道徳教育への興味関心の高さがうかがわれました。会場定員いっぱいの参加者で熱気がある研究大会になりました。



<研究発表の部>

○基調提案「道徳科の質の高い指導法と評価に関する研究発表」○

提案者 三ツ木純子先生（川崎市立鷺沼小学校長）松澤ゆかり先生（川崎市立宮崎小学校長）

児童の学習評価や成長の道徳性に関わる様子を把握するには、学習活動を通じて多面的・多角的な見方へと発展しているか、価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかを見とること。そのためには、「授業・学習・評価」の一連の流れが大切。質の高い、多様な学びを積み重ねていきたい。ポイントになるキーワードは「自我関与」「問題解決的な学習」「道徳的行為の体験的活動」である。それには、課題を明確にすること、子どもが教師の発問に対して考えを表明、子どもの言葉で課題解決をしていくことが大切である。発問は、子どもの考えをつなぐような発問で、次につながっていくような発問が重要。子どもの発言を生かし、思考の流れが途切れずに自己課題を解決していく授業が理想である。展開教材を通して、登場人物の生き方から考える。自分ごと、自由思考、多面的・多角的に捉える。「どうして〇〇なのだろう」と教材にすでに書いてあるものは、活用してもよい。「どうして主人公は、〇〇という行動をとったのかな」は体験的に考えても可能。迷う質問をたくさんすることが大切。みんなが迷うことで、沢山の友だちの考えを知ることができる。子どもの意識がつながる発問をしていく。振り返りの発問では、その時間に考えた価値について、自分事に落としていく事が大切。（今までの自分はどうでしたか？〇〇をしてよかったことはありますか、など）道徳ノートの活用もとても有効。でも、書くのが苦手な子は、教師が聞いたり、記録をしたりしてもよい。とにかく、振り返りを次の授業にどんどん生かしていく意識を持つ。子どもたちの自己評価や相互評価も大切にしていきたい。



○事例研究「道徳科における評価に関する具体的な実践」○

提案者 神生留佳先生（川崎市立戸手小学校教諭）

今回の指導のポイントは、①自己肯定感を高める②自分の成長を感じられるように進める③自分も友達も良いところを認められるようになる、ということだった。今までとこれからを意識して振り返りを書くようにした。また、振り返りが見取りと違う時には面接法を使った。「千羽づる」の授業で子どもたちは、嘘をついたことがないって考えるのはウソだろうと子どもたちは考えた。嘘って気持ちが悪いけど、なんかついちゃう。でも、ウソがうまくいっても「よっしゃ」という気持ちにはならない、という本音が聞き出せた。自分が気持ち良くいる為にどうすればいいかと考えられた。「ブランコ乗りとピエロ」では、呟くなどをして、友達の話をしっかり聞く様子が見られた。意見が違う時こそ、相手を責めることをせずに、相手の思いを聞かないといけない、話し合いたいと考えた子どもが多かった。面接をした時にも「意見が合わないままは良くない、自分のことも分かってもらえる、もっといい考えも生まれそうだね」となった。面接でより深く考えを聞くと、相手はこう思っているだろうと決めつけていることが多かったことに気づく子どもが多かった。聞かないと分からないこともあるねという気づきも生まれた。「あいさつって」の授業では、高学年になると挨拶が少なくなる事を受けて授業を行った。自分の恥ずかしいという思いと、挨拶は大切だと思うという葛藤を感じているAさんの考えを掘り下げると「挨拶をする人とされる人の気持ちが分かった、実行していきたい。」という振り返りにつながった。また、事後に、恥ずかしいけど、近所の人に挨拶してる。という何人かの子どもの声も聞こえてきた。1月の実践では、単純にすぐに困った人を助けられる。友だち、先生、誰にでも。と思っていた子どもに、授業後面接すると、「とにかく助けることが

大切だと思っていたけど、相手のことを思いながら助けることが大切だと考えていることが分かった。」という気持ちになっていることが聞けた。みんな考え方が違うから認めることが大切なんだな、と思うようになったと言っていた。4月の道徳アンケートでは、「話が面白い」「友だちの意見聞くのが楽しい」という振り返りが多かったが、12月になると「自分が高まっていく楽しみ、を感じられたら良い」「相手の話を聞きたい」「意見を言い合いたい」とねらいに迫れた様子が見られた。今後は話し合ったことと生活とつながること、自分を高めていくこと、ができると良いと思っている。

その後、小グループに分かれての研究協議が行われました。全参加者が、6～7人位のグループに分かれ、基調提案についての意見や、それぞれの道徳の実践を出し合いました。普段から様々な道徳の実践を行っている方々なので、短い間でしたが、中身の濃い討議になりました。



<講演会>

「道徳科の指導と評価の一体化を目指して」 講師 柴原 弘志 先生 (京都産業大学教授)

道徳の授業においても、教師は明確な「評価の視点」を持っていることが大切である。それには、ねらいを具体化・明確化しなくてはいけない。道徳の主旨は多面的・多角的に考える事だから、例えば、「時間軸」「空間軸」「立場を変える」など、どの面から多面的に考えさせるのかを意識した授業をする。そして、成長の様子を見取るのだから、少なくとも2点間の比較になるはずである。ワークシートに書きこむ時に、既に評価を意識して評価簿に残していくことで継続的な記録がとれる。それには、普段から日常の中でどんな成長した姿を見取るのかを意識していることが大切。



評価の「観点」と「視点」は違う。観点ではなく「視点」。その子の「状況」と「学び方」プラスその子の姿の具体を示すことで、その子自身が自分でも参考にできる視点が示せる。勇気づける評価でなくてはならない。道徳に関わる評価は2つ。「児童に対する評価」は評価の「視点」。「授業に対する評価」は評価の「観点」。どちらも、道徳の目標に対して、効果的に行われたかどうかを見ていくことが大切。

大切なポイントは、児童生徒の発言を「傾聴して」受け止めることで、子どもの考えを「聞く」のではない。音声言語だけではない。観察などを使って本来の子どもの姿を見て、聴いてとらえる。ただ、子どもの発言を聞くのではない。本音で言っているのか、根拠は何か、を傾聴して聴く。問い返し、切り返し、等を使って、深めていく。別の言い方は？具体的には？など。教師は、子どもの本当の気持ちや言葉を聞き取れるようにすることがとても大切。言葉を「音声言語」として受け止めずに、「聞く」ではなく、「聴く」で受け止めないとダメ。それには、やはり、言語分析と観察が大切。そのことは、教師だけではなく、子どもたち自身にも意識させる。『人の話は聴く』こととは、相手の存在を認めて、寄り添っていくことである。聴き方名人は、話し方名人を作る。聴き合える集団を作るのは、きちんと「聴ける教師(大人)」である。そして、相手に伝える時についても、「話す」のではなく、『語る』。舌で伝えるのではなく、「吾の言葉で語る」。「話し合い」から『語り合い』へ。『共に考え、共に語り合う』これが道徳科の内容。『自分と対話し、言葉をさがす』これが道徳の授業。



また、『重層的発問(問い返し)』も、教師はしっかり相手の言葉を受け止めよう、聴こうと思ったらできるはずである。「確認、焦点化(それって、どういうこと?)」「根拠、理由(なぜ、どうしてそう思うの?)」「言い換え(他の言葉で言うと?)」「比較(主人公や他の人の考えとどう違うの?)」など。なので、「どうするのか」を聴く時には、必ず「なぜそうするのか」を聴くと、行動のみ方法論のみを論じることにはならないはず。

そして、授業の最後、振り返ったことも、ぜひ、交流したい。振り返るポイントも示したが、このポイントも低学年から高学年に向けて増えていく。低学年は3つ位で、高校生になると7つに増える。先ほども示したが、この授業の観点はいつも子どもに示しておくことが大切。それが「内容知」+「方法知」の学び方になる。受容語、評価語も含めて子どもたちに学び方も学ばせたいものである。

あっという間の4時間でした。今年は特に、皆さんが参加できる場面も多く、普段の活動の交流もできました。柴原先生の講演でも私たち教師の側に立って、具体的に示唆していただき、すぐに明日につなげることができる研究大会でした。

(詳しい内容につきましては神奈川支部ホームページをご覧ください。 <http://www.doutokukanagawa.com/>)